

ワルシャワ・ゲッターにおける政治と宗教

—労働シオニズムの物語を越えて—

エリ・イツサー・カヴォン

要旨

1943年4月、ワルシャワ・ゲッターのユダヤ人がナチスに抵抗して起こした武装蜂起は、ホロコーストの記憶の中でも伝説的な地位を獲得している。しかし歴史家たちは（ユダヤ人もそうでない者も含め）この反乱をどのように描出し、どのように解釈してきたのだろうか。イスラエルでは（建国から30年間にわたりダヴィド・ベン＝グリオンが主導する労働シオニズムが社会と政治の場を席卷していたために）、ホロコースト、とりわけワルシャワ・ゲッター蜂起の解釈においては、建国者のイデオロギーが偏向的に適用されてきた。政治的イデオロギーは史実の実像をゆがめてしまう。ゲッターの生活とその壮絶な最期に至る過程では、修正シオニズムとユダヤ教の両者が重大な役割を果たしていたが、労働シオニストがホロコーストの顛末を語るときに、両者の存在が顧みられることはなかった。しかしイスラエルでポスト・シオニストが台頭し、政治の世界で右派シオニストが勝利を収め、このユダヤ国家でユダヤ教が宗教的復活を果たした今、これまで黙殺されてきた別の物語が表舞台に登場しようとしている。イスラエル国家を支配してきた政治的イデオロギーによる史実の歪曲を正すために、修正シオニズムと正統派ユダヤ教の役割がついに明かされようとしているのである。ジャボティンスキー率いる修正主義者の一派はワルシャワで勇敢にナチスと闘った。彼らが武装蜂起で果たした役割は研究に値するものであり、その結果は公表する価値がある。またユダヤ教徒たちも信仰を貫くためにナチスに抵抗した。ワルシャワ・ゲッター最後のラビ、メナハム・ジエンバは数世紀に及ぶ殉教の伝統を覆し、ユダヤ法は武装抵抗を求めていると檄を飛ばした。本稿では、日の目を見るべき新たな物語を検証し、ショア（ユダヤ人大虐殺）の実像と現代世界における宗教の役割を考察してゆく。

キーワード：労働シオニズム、修正シオニズム、ポスト・シオニズム、殉教、ハラハー（ユダヤ法）

はじめに 労働シオニズムを越えて—新たな物語の探究

1957年3月3日、真夜中を数分過ぎたテルアビブで、3人の男がレッツ・カストナーに凶弾を浴びせた。カストナーは、第二次世界大戦後にイスラエルに移住してきたハン

ガリー系ユダヤ人で、ジャーナリストとして活躍するとともに、労働シオニスト政権で要職を務めた人物である。彼はこのときの傷が元で2週間後にこの世を去る。その毀誉褒貶の人生と経歴をめぐる顛末は、今もイスラエルとユダヤ民族にとって重い課題となっている¹⁾。

第二次世界大戦の末期、レッソ・カストナーは、ナチスによる大量殺戮からハンガリーのユダヤ人を救うために先頭に立って奔走していた²⁾。1944年の春から夏にかけてゲシュタポ将校アドルフ・アイヒマンと交渉を重ね、その結果1684人のハンガリー系ユダヤ人の命を救ったのである。当時アイヒマンは、ヨーロッパ各地のユダヤ人をアウシュヴィッツ=ビルケナウ絶滅収容所へ移送する計画の責任者を務めていた。このとき収容所への移送を免れたハンガリー系ユダヤ人には、実業家、知識人、正統派ラビ、カストナーのシオニスト仲間、彼と敵対する反シオニスト派、各地の収容所で強制労働に従事していたポーランド系ユダヤ人とスロバキア系ユダヤ人などがいた。ユダヤ人をスイスに逃す見返りに、ナチス側は一家族につき1500ドルを要求した。この金額を工面できない者のために、カストナーはブタペストの裕福なユダヤ人たちに逃亡計画を持ちかけ、必要な資金を集めたのである³⁾。

1952年8月、ナチスの大量虐殺を生き延びた別のハンガリー系ユダヤ人がイスラエルでカストナーを糾弾するパンフレットを発行した。マルキエール・グリーンワルドというこのユダヤ人は、当時労働シオニズム⁴⁾ 政権の公職にあったカストナーに対し、シオニズム運動の仲間と自分の家族を救っておきながら、それ以外のハンガリー系ユダヤ人を見殺しにしたという批判を浴びせたのである。これに対しカストナーは名誉を棄損されたとしてグリーンワルドをイスラエルの法廷に訴えた。公判は1954年1月1日に開始された⁵⁾。メナヘム・ベギン率いるヘルート党に与する修正シオニスト⁶⁾ が、第二次世界大戦中のナチスの大量虐殺をめぐる労働シオニズム側の説明に異論を呈したのは、これが初めてのことであった。

グリーンワルドの弁護を務めたのはシュムエル・タミルという31歳のヘルート党の活動家である。彼には、この名誉棄損裁判の場で、ナチスと結託してユダヤ人の根絶を企てたかどで労働シオニズム政権の責任を追及しようという思惑があった⁷⁾。カストナーとナチスとのつながりを証明できれば、ダヴィド・ベン=グリオンとマパイ党にとって大きな打撃となるだろう。タミルにはイスラエルの労働シオニズム体制を攻撃してマパイ党政権を打倒するという野心があり、グリーンワルドを弁護することは、その目標達成への第一歩だったのである。結果的に裁判ではグリーンワルドが勝訴し、カストナーはナチスの協力者として糾弾された。労働シオニズムを政権から引きずり下ろすというタミルの目論見は実現しなかったが、カストナーの暗殺から20年を経て、メナヘム・ベ

エリ・イッサー・カヴォン：ワルシャワ・ゲッターにおける政治と宗教：労働シオニズムの物語を越えて

ギンがイスラエルの首相の座に就くことになる。そしてこのとき初めて修正シオニストたちは、イシューブ（ユダヤ人共同体）、イスラエル国家、そしてホロコーストの歴史を自分たちの側から語るができるようになったのである。カストナー裁判は、イスラエルの労働党政権とは違った角度からホロコーストの物語を構築しようという初の試みであった。1500人以上のユダヤ人を救ったこのハンガリー系ユダヤ人にとって、この裁判が果たして公正なものであったかどうかという議論は別稿に譲ることにする。

エラン・カプランは、ウラディーミル・ジャボティンスキーの足跡を詳細にたどる研究の中で、「ポスト・シオニズム」の枠内で、右派の視点から見た新たな物語を構築する可能性を検討している。「ポスト・シオニスト」とは「イスラエルの文化と歴史の認識にパラダイムシフトを起こすイスラエル人知識人（歴史家、社会学者、文化評論家、芸術家）の集団」をいう⁸⁾。そしてポスト・シオニストは、イスラエルを支配する労働シオニストのイデオロギーを打破し、イスラエル国家建設から30年間顧みられることのなかったイスラエル人の声を拾い上げることを目標に掲げている。労働シオニズムのイデオロギーがアラブ系イスラエル人、ユダヤ教徒、アラブおよびイスラーム圏出身のユダヤ人に背を向けてきたのに対し、修正シオニズムは、20年来繰り広げられてきたイスラエル建国者に対するポスト・シオニズム側の批評を金科玉条としている。ポスト・シオニストの中にはユダヤ人国家としての正当性をイスラエルから剥奪するためにこうした批評を展開する者もいるが、実はこの批評は、これまで日の目を見ることがなかった新たな物語の再発見を可能にするものでもあるのである。ジャボティンスキーの系譜を継ぐイスラエル人であり、シンシナティ大学のユダヤ学教授でもあるカプランは、序文の中で次のように述べている。

1977年の選挙でメナヘム・ベギンはリクード党を圧倒的勝利に導き、数十年におよぶシオニズム運動の労働党支配は唐突に幕を下ろした。何年もの間シオニスト左派により疎外されてきた修正主義の一派が、第一党となってイスラエルの政治の舞台に躍り出たのである。ユダヤ民族主義の年譜において、存在感を放ちながらも二義的な扱いしか受けてこなかったシオニズム運動の歴史は、今やシオニズムの歴史とイスラエル現代史の重要な一部となったのである⁹⁾。

カプランの研究は修正シオニズムの語るホロコーストの物語を重点的に論じたものではない。しかしショア（ユダヤ人大虐殺）に対する労働シオニストの解釈や歴史研究の中で従来切り捨てられてきた声が、リクード政権の誕生を機に、新たに国民の耳に届くようになったことは確かである。こうした貴重な声に耳を傾けることにより、我々は、第二次世界大戦下のヨーロッパでユダヤ人が起こした行動に関し、不確かな伝聞を排した、より完全な理解を育むことができるのである。

イスラエル人ジャーナリスト、トム・セゲフは、労働シオニズムの衰退と入れ替わりに表面化してきたもう一つの声なき声について詳細な検討を加えている。それはユダヤ教徒の声である。自著『*Elvis in Jerusalem: Post-Zionism and the Americanization of Israel* (邦題：エルヴィス・イン・エルサレム：ポスト・シオニズムとイスラエルのアメリカ化)』の中でセゲフは、社会主義を奉じるイスラエルの建国者たちがユダヤ教に代わる「真の世俗文化の構築」に失敗したことを大きく取り上げている¹⁰⁾。セゲフはこう述べている。「イスラエル国家における宗教の立場をめぐる紛争は、その大部分が、政治的交渉による種々の現実的な妥協策を通して解決された。こうした経緯は、イスラエル文化がユダヤ文化に代わり得る意味ある何ものかを構築できなかったことを物語っている¹¹⁾」。ダヴィド・ベン=グリオンは、ユダヤ教は近代社会主義国家の化石になるだろうと考えていたのかもしれないが、現実はその逆であった。時が経つにつれて、社会や政治の場で超正統主義や宗教的シオニズムが勢力を増し、労働シオニズムの都合で何年もの間封印されてきた宗教者の声が、今国民の耳に届きつつあるのである。1977年のリクード党の勝利以来、ユダヤ教はイスラエル社会で着々とその存在感を高め、積極的に活動の範囲を広げてきた。「ポスト・シオニズム」の世界で（正確には「ポスト労働シオニズム」と呼ぶべきであると筆者は考えているが）ユダヤ教徒の物語が表層に浮かび上がろうとしている。そしてこの物語には、宗教者の視点から語られるシヨアの顛末も含まれている。

本稿では、ユダヤ人がワルシャワ・ゲットーでどのような生活を送っていたのか、またその生活がどのように理解されてきたかを論じることで、今浮かび上がりつつある修正シオニストとイスラエルのユダヤ教徒の両者が語るシヨアの物語を検証してゆく。まずゲットーの生活に対する労働シオニストの見解とナチスの横暴に抵抗したユダヤ人たちの英雄的行為について簡単に触れておきたい。イスラエル国家の誕生から50年の間、ジャボティンスキーの一派がゲットーで果たした役割に光が当てられることはほとんどなかった。これは単にイデオロギーの問題だったのか、それとも最近まで修正主義者側の物語が黙殺されてきたのには何か理由があったのだろうか。そしてゲットーのユダヤ教徒のことがほとんど知られていないのはなぜなのか。ゲットーのラビは（そのほとんどがハシディズム派であった）ナチスのユダヤ人大量虐殺への抵抗運動に対してどのような態度を取っていたのか。こうしたラビとは何者であったのか、そしてこの悲惨な時代に、公然と現実に向き合いながら、なぜ信仰を失わずにいることができたのか。以下に筆者は、一次資料と二次資料を精査することによりこれらの問いへの回答を試み、これまで日の目を見ることがなかったが、今こそ語られるべき物語に新たな光を当てたいと思う。

語られなかった物語：ワルシャワ・ゲットーの修正シオニストたち

文学や映画に描かれ、ユダヤ人の記憶に残るワルシャワ・ゲットー蜂起は、ユダヤ人による抵抗の歴史の輝かしい一章として、また第二次世界大戦中ユダヤ人は「子羊のようにはふり場に引かれていった」という見方を否定する出来事として、一般に捉えられている。この認識は一部正しいが、実際に起きたことはもっと複雑であった。ワルシャワ・ゲットー蜂起は、トレ布林カ収容所のガス室で殺されるよりは尊厳ある死を遂げることを選んだユダヤ人青年たちが、一致団結して起こしたものではなかった。実は反乱を指揮したワルシャワのユダヤ人青年たちは、対立する政治的イデオロギーを掲げる二派に分かれており、長年にわたって根強い敵対関係にあったのである。1つは左派シオニストの代表者で構成されるユダヤ人戦闘組織（ZOB）で、ハショメル・ハツァイル、ドロール、アキバなどの青年組織の抵抗運動を指揮していた。ZOBは1942年7月28日の初会合の場で結成されたが、これはトレ布林カ絶滅収容所にワルシャワ在住ユダヤ人を移送するナチスの計画がピークを迎えた時期と一致する（その後ZOBは、ユダヤ人社会主義労働者同盟の代表者もメンバーに迎え入れている¹²⁾。もう片方は、修正シオニストがZOBに先駆けて結成したユダヤ人軍事連合（ZZW）であるが、ZZWの設立をめぐる経緯はよく分かっていない。

一見すると、ナチスほどの強大な敵に刃向かうのであれば、同じ旗の下にユダヤ人の総力を結集した方が合理的で現実的ではないかと思われるかもしれない。しかしユダヤ史の現実と人間の本質はそうすることを許さなかった。ユダヤ民族の歴史始まって以来最悪の危機に直面したときでさえ、ユダヤ人は、政治的イデオロギーの対立に阻まれて一枚岩となることができなかつたのである。シオニズム左派とウラディーミル・ジャボティンスキー率いる急進右派の修正主義者の間には憎しみの念しかなかった。労働シオニズムと修正主義の激しい敵対関係は1920年代から続いていたが、互いの敵意が一気に噴き出したのは、テルアビブの海岸でハイム・アルロゾロフが暗殺された1933年の夏のことである。マパイ党の経済政策を担う建築家であり、労働党の若きホープの1人であったアルロゾロフは、暗殺される前、ナチスドイツとの間で交渉を行い、ドイツのユダヤ人がイスラエルに移住することをヒトラー政権に認めさせようとしていた。ジャボティンスキーの一派はこの企てに激怒し、後にアルロゾロフ暗殺に手を染めることになる¹³⁾。ダヴィド・ベン=グリオンと労働シオニストはアルロゾロフを殺害した修正主義派を決して許さなかった。ベン=グリオンがジャボティンスキーを「ウラディーミル・ヒトラー」と呼んでいたことから、この修正主義派の指導者に対するベン=グリオンの憎しみの深さがうかがえる¹⁴⁾。もっともジャボティンスキーがこの名で呼ばれたの

は、彼自身の責任に帰する部分もあった。彼は自分が指揮する青年運動組織ベタルのメンバーに（ナチスのような）茶色の軍服を着せて軍事パレードを行い、武装訓練を実施していたのである。ジャボティンスキーは、断じてシオニズムの先進的気性に訴えようとしていたわけではなかった。むしろ彼は、ヨーロッパのユダヤ人とイスラエルのイシュューブのユダヤ人に対し、遠からず訪れる惨禍に備えるよう警告を発することに力を入っていた（もっとも1940年にこの世を去ったジャボティンスキーは、ユダヤ人を待ちうける運命がこれほど過酷なものになるうとは予想すらしていなかった）。労働シオニストと修正主義者が団結してナチスの脅威に立ち向かうということは、両者の敵意の深さを考えると、あり得ないことであった。

ジャボティンスキーはムッソリーニ率いるファシスト政権下のイタリアに傾倒していたが、ワルシャワ・ゲットーの二大レジスタンス集団が分裂していた理由はそれだけではない。問題はもっと実務的なものであり、両者の交渉は、権限をめぐる意見の対立が原因で、蜂起前からすでに決裂していたのである。歴史家イスラエル・ガットマンはZOBの指導者イツハク・ツケルマンについて述べる中で、ZOBとZZWの交渉が成立しなかったのは、ZZW側の修正主義集団、ベタルの指導者が、ZZWの上層部を統一組織の指揮官に据えるよう要求したことが原因であると指摘している。ベタルの青年黨員たちの言い分は、ZZWの指導者の方がZOBよりも実戦の経験を積んでいるため、ナチスに対する武装蜂起の指揮官にふさわしいというものであった。結局、ゲットー内に統一戦闘集団が組織されることはなかった¹⁵⁾。確かにZOBとZZWはワルシャワ・ゲットーの最後の砦を防守するために連携して行動したが、両者は最後まで結束することがなく、やがてこの蜂起は、悲劇的で壮絶な結末を迎えることになる。ユダヤ人は、ワルシャワ・ゲットー蜂起を迫害者ナチスに対する一丸となった最後の抵抗として記憶している。しかし、この広く共有されたユダヤの記憶には不備がある。ゲットーのユダヤ人は死の影の中でドイツに対して立ち上がり、反抗しながらも、政治的忠誠心や信条では分裂していたのである。

数々の理由により、1948年のイスラエル建国後に労働シオニストの側から語られたワルシャワ・ゲットー蜂起の顛末は、ZOBの英雄的行為だけに光を当てたものであった。イスラエル建国後の30年間、修正主義派のZZWの存在はホロコーストの物語の埒外に置かれていたのである。疑いもなくその理由の一部は、イデオロギー的、政治的なものであった。ジャボティンスキーに対するベン＝グリオンのあからさまな憎悪は、イシュューブ時代を経て、イスラエル国家成立後にまで引き継がれたが、その頃ベン＝グリオンが目の敵にしていたのはジャボティンスキーではなく（ジャボティンスキーはイスラエル建国の8年前にニューヨークで客死している）メナヘム・ベギンであった。ベギ

エリ・イッサー・カヴォン：ワルシャワ・ゲットーにおける政治と宗教：労働シオニズムの物語を越えて

率いるヘルート党は、イスラエルで一世代間にわたり執拗に労働シオニストを攻撃したが、1977年までは限られた影響力しか持たなかった。一方ベン＝グリオンの側も、1967年に第三次中東戦争が勃発するまで、共産主義者や修正主義者と一緒に政権を組むつもりはないと公言していた¹⁶⁾。イスラエルではここ30年間リクード党が政権を担っているために、イスラエル建国当時のイデオロギー的対立（労働シオニズムと修正主義の敵対関係）が、このユダヤ人国家の政治・社会生活の現実であったことを国民は忘れてしまっている。建国後の30年間、イスラエルは（良きにつけ悪きにつけ）労働シオニズムの支配下にあった。その結果、修正主義派の物語とイデオロギーは排斥されていたのである。

だからと言って筆者にはそのことをことさらに揶揄するつもりはない。ゲットー蜂起を研究する歴史家の注目が ZOB だけに向けられてきたのには、もっともな理由があるからである。この抵抗運動では、ZOB の指導者が多数生き延びたのに対し、ZZW のメンバーはほとんど全員が命を落としている。ZOB の闘士、イツハク（アンテック）ツケルマン、マレク・エデルマン、ジヴィア・ルベトキンらはシヨアを乗り越え、後にイスラエルやポーランドに移り住んでその体験を書き残している。一方 ZZW を指揮していたダヴィド・アプフェルバウム、パウエル・フレンキエル、レオン・ロダルは瓦礫と化したゲットーで最期を遂げた¹⁷⁾。イスラエル・グットマンは、第二次世界大戦史に関する著作の中で、ワルシャワのユダヤ人について次のように記している。

大量の正式な記録文書と関係者の証言のお陰で、我々は ZOB 結成前夜に行われた討論や協議の概要を知ることができる。（略）またどの団体が ZOB に加入していたのか、その指導者は誰か、内部にどのような制度が作られたのか、そして彼らが自分自身にどのような目的を課したのかということも明らかになっている。

残念ながら、修正主義派のユダヤ人軍事連盟については事情が異なる。信頼できる資料が不足しているために、結成に至る過程を知るすべがないのだ。従って、この団体の結成時期と組織の内容については、正確なところは分からない。しかも本来であれば詳しい顛末を記録し、説明してくれるはずの数少ない生存者も、ZZW の結成当時の様子や発展の全容を語ってはいない。このことは、ZZW 発展の経緯を解明する上で大きな障害となっている¹⁸⁾。

ワルシャワ・ゲットー蜂起の顛末について語った数少ない ZZW の指導者の 1 人にデヴィド・ウドウンスキがいるが、グットマンは1994年の研究書の中で、その証言についてごく簡単に触れるにとどめている。ウドウンスキの記憶は信頼するに足りないと判断し、修正主義派の運動を指導した重要人物であるにもかかわらず、その記述にわずか3ページしか割いていないのである。修正主義派の青年組織ベタルのメンバーがワルシャワからトレブリンカ収容所へ移送される前にフルビエシュフの農場に滞在していた

ことは紛れもない事実であるが（後に彼らは蜂起に加担するためにゲットーに舞い戻っている）、ZZWの結成をめぐる経緯とZOBとの交渉内容についてのウドウインスキの証言にグットマンが信頼を置いていないことは明らかである¹⁹⁾。

グットマンとは対照的に、ルーベン・アインシュタインはその著書『*The Warsaw Ghetto Revolt*』の中でジャボティンスキー派を大きく取り上げ、詳細な検討を加えている。この著作には、ZZWがZOBよりも本格的な武装を整えていたことが指摘されており、またポーランド国内軍がZOBのユダヤ人レジスタンスの支援を拒絶したために、その一部隊が軍の命令に従うことを拒否して国内でレジスタンス運動を組織し、修正主義派との間に信頼関係を築いていたという事実が述べられている。修正主義派は早くも1939年に、ポーランド軍のヘンリク・イヴァンスキ予備軍隊長と接触していた。ユダヤ人に対する憎悪が渦巻くポーランドにいながら、イヴァンスキは真に正しき「異教徒」であった²⁰⁾。イヴァンスキの部隊は、反乱が続く間ゲットーを防守するためにZZWにマシンガンを供給していた。1943年5月にナチスがゲットー蜂起の制圧を宣言した後でさえ、ワルシャワの下水道を縫うようにして反乱軍の残党に武器や食料を届け続けたのである。イヴァンスキの息子たちや兄弟はゲットー蜂起を援護する闘いで命を落としている²¹⁾。ポーランド国内軍の地下組織との連絡役という重要な役目を担ったのはZOBではなくZZWであった。修正主義派の優れた武力がなければ、ナチスを相手にワルシャワ・ゲットーのユダヤ人が蜂起することは不可能だったであろう。ZZWの指導者の中に生き残った者が少なかったのは、ナチスが高い防戦力を最大の脅威とみなし、ZZWを集中的に攻撃したためと思われる。

近年、ZZWに属する修正主義派がワルシャワ・ゲットー蜂起で果たした役割を再評価する動きが起こっているが、その最大の立役者はモーシェ・アレンスである。これは決して意外なことではない。アレンスは1925年にリトアニアで生まれ、米国の有名大学で機械工学と航空工学を修めた。後にイスラエルに移住し、修正主義派の軍事機構、イルグンに所属してイスラエル独立戦争を闘っている。ハイファのイスラエル工科大学で教鞭を執った後、イスラエル・エアクラフト・インダストリーズに転身して責任者を務め、その後ヘルート党、次いでリクード党政権に参加。1977年以降はリクード政権下で大臣職を歴任している。アレンスは筋金入りのジャボティンスキー派であり、イスラエルはパレスチナ人との間に何らかの合意を締結し、第三次中東戦争で占領した土地を返還して和平を実現すべきだという主張に対して、イデオロギーの面から反対の立場を取っていた。長年にわたりジャボティンスキーの系譜を継ぐ政権に加担してきたアレンスだからこそ、修正シオニストたちがワルシャワ・ゲットー蜂起で果たした役割に新たに光を当てるよう声を大にしたのは、当然のことであった²²⁾。

2005年にアレンスは、1943年4月の武装蜂起でZZWが果たした役割に関する論文を発表した。その目的は、何年もの間イスラエルの政界や学界から黙殺されていたこの武装組織の「重要な役どころ」に光を当てることにあった²³⁾。アレンスが参考にした資料は、修正主義者が残した数少ないゲットー体験記や、イヴァンスキをはじめとするポーランド人キリスト教徒の武器調達作戦やZZW支援活動に関する目撃証言、そしてドイツ側の記録文書などである²⁴⁾。ZZWはムラノウスキー広場を拠点にドイツ軍への攻撃を展開したが、アレンスの論文でもこのゲットー内の防衛拠点における修正主義派の戦闘にほとんどのページが割かれている。またこの論文ではZOBとZZWの戦略的な違いが指摘されている。ZOBが奇襲をかけては退くという戦法でドイツ軍を迎え撃っていたのに対し、ZZWはムラノウスキー広場に腰を据えてナチスとの「長期戦」に備えていた。アレンスはこうしたZZWの戦術を根拠に、ゲットーの蜂起で「主要な役割」を担っていたのは修正主義派であったと断じている²⁵⁾。ZZWはZOBよりも本格的な武装を整えていたため、ドイツ軍はZZWの制圧に手こずった。戦闘がこれほど長引いたのは、修正主義派の武力が優れていたためであり、ZOBの奇襲攻撃だけに頼っていたなら、反乱軍が1カ月以上持ちこたえることはできなかつただろう。

アレンスの論文は、イスラエルで支配的であった労働シオニスト組織が無視してきた新しい物語を歴史記録に導入したという点で重要である。修正シオニストに言及したルーベン・アインシュタインを除いては、1943年4月の蜂起に修正シオニストとベタルが重要な役割を果たしたことは、ワルシャワ・ゲットー史で語られることはなかったのである。ZZW側の物語が黙殺されていたのは、イスラエルの政治の実態とイスラエル史の第一世代を労働シオニズム政権が牛耳っていたことが大いに関係していると筆者は考えているが、もちろんそれだけではない。現実にZOBの指導者の多くが生き残り、後にZOBの活動を詳しく回想しているのに対し、ZZWの指導者はほぼ全滅してしまったため、彼らの側の物語はほとんど語られていないのである。1943年のワルシャワ・ゲットー蜂起の顛末を振り返ったときにとりわけ心を打つのは、大量虐殺と民族根絶の脅威に直面しながらもユダヤ人青年たちが自分たちの政治的信念を捨てなかったことである。彼らが結束しなかったという事実は、決して筆者を落胆させるものではない。その事実が物語るのは、ユダヤ人は人間であり、アリストテレスのいう「政治的動物」であったということである。ワルシャワ・ゲットー蜂起の物語は、ユダヤ民族の統一という大義の下に命を投げうった「英雄的殉教者」としてワルシャワの抵抗運動者たちを描くのではなく、もっと複雑な現実を我々に突き付けている。ユダヤ人たちは自分自身の政治的イデオロギーを貫くことで、最後まで人間であろうとしたのである。ユダヤ史上最悪の悲劇（ポーランドで300万のユダヤ人が虐殺されたという事実）でさえも、ワル

シャワ・ゲッターのユダヤ人青年たちの政治的信念とイデオロギーの力を打ち砕くことはできなかった。ユダヤ人は今も65年前も結束などしていなかった。おそらくその歴史を通して、ユダヤ人が結束したことは一度たりともなかったのだろう。ホロコーストを「子羊のようにほふり場に引かれていった」600万人のユダヤ人の虐殺ととらえることは、一人一人が独自の人格とイデオロギーと信仰を持ち、己の信念を貫いて死んでいったユダヤ人の記憶を辱めることに他ならない。この事実を踏まえた上で、本稿の後半部分、すなわちワルシャワ・ゲッターにおける宗教の役割と信仰生活に論を進めよう。

ワルシャワ・ゲッターの信仰生活—ラビ・ジエンバと抵抗の神学

ワルシャワ・ゲッターのユダヤ人がどの程度ユダヤ教を信仰し、どのように宗教儀式を執り行っていたのか、それを知るすべはない。ナチスに虐殺されたワルシャワのユダヤ人は、その多くがユダヤ教徒であり、ハシディズム派のレベ²⁶⁾に忠誠を誓っていたことは確かである。しかしこれまでに彼らの声が届くことはなかった。それには2つの理由がある。ゲッターのユダヤ教徒と彼らを指導したラビが戦後まで生存しなかったために、ワルシャワ・ゲッター内部の信仰生活を語る者が存在しなかったということも理由の1つであるが、もちろんそれだけではない。そこには、シオニズムにまつわるもっと複雑な事情が絡んでいる。1960年代初頭のアイヒマン裁判に先立つ数年間、イスラエルのシオニストが描くユダヤ人像は、死を神の意志と受け止め、唯々諾々と運命に従った犠牲者というものであった。現にホロコースト以前は、ほとんどのユダヤ人が（その多くは正統派ユダヤ教徒であった）、シオニズム運動は救世主の到来を待つことなくイスラエルの地をユダヤ人の手に取り戻すことを企てているとして、否定的な立場を取っていた。イデオロギーに関して言えば、世俗的シオニズム、とりわけ労働シオニズムは、敵対する宗教的イデオロギーの役割に目もくれず、その物語にほとんど注意を払わなかった。しかし以下の論からも分かるように、ユダヤ教徒は、ワルシャワ・ゲッターで、そしてシヨア全体においても、シオニズムと対立する正統派神学よりも、あるいは正統派ユダヤ教と対立するシオニズムの政治的イデオロギーよりも、はるかに複雑な役割を果たしていたのである。イスラエルの労働シオニズムが衰退し、代わって宗教シオニズムと超正統派が勢力を増しつつある今こそ、ユダヤ教徒の物語に耳を傾け、1939年から1945年にかけての出来事を見直すべき時が来ているのである。

ワルシャワ・ゲッターのユダヤ教徒について調査する場合、貴重な資料として一番に名が挙がるのが、エマヌエル・リングェルブルム（1900～1944年）の『オネグ・シャボス』²⁷⁾という記録集である。第二次世界大戦勃発前、リングェルブルムはアメリカ・ユダ

エリ・イッサー・カヴォン：ワルシャワ・ゲットーにおける政治と宗教：労働シオニズムの物語を越えて

ヤ人共同配給委員会で働いていた。この歴史家は、多くのゲットー住人の協力を得て、ワルシャワ・ゲットーにおけるユダヤ人の迫害と虐殺の記録をまとめている。新聞記事、地下出版物、手紙、日記、ユダヤ人の移送と虐殺に関するドイツ側の文書などを収集するとともに、他のゲットーや強制労働収容所からワルシャワに流れてきたユダヤ人の証言を記録に残したのである²⁸⁾。その記録はユダヤ人のゲットー生活を詳らかにするものではあるが、ナチス支配下の信仰生活に関する資料はさほど多くなく、ユダヤ人評議会の役割、当時の社会制度、生存をかけたゲットー住人の日々の闘い、トレブリンカ絶滅収容所にユダヤ人を移送するドイツ軍の作戦などが主体となっている。とは言え、ゲットーのユダヤ人の信仰に関するリングェルブルムの記述は資料として大きな価値を持つ。

1940年10月のリングェルブルムの記録には（これはドイツ軍がユダヤ人にゲットー移住を強制した時期である）こう書かれている。「ワルシャワ最高の公共機関が破壊され」、「800本のトローラーの巻物が冒流された」²⁹⁾。また翌月の記録には、ゲットーの正統派ユダヤ教徒が迫害を受けている様子が数行にわたって記載されている。

あご鬚をのばし、伝統的なフロックコートを身に付けた信心深いユダヤ教徒の自己犠牲的精神には感嘆の念を覚える。彼らには暴行が加えられるというのに³⁰⁾。

ゲットーには、ドイツ軍の制裁を恐れずに、伝統的なハシディズム派の正装を放棄しなかったユダヤ教徒が確かに存在していたのである。1940年12月のオネグ・シャボスには次のような記述が見られる。「プラガのラビが酷い暴行を受けた。帽子を取ったその下にスカルキャップをかぶったままにしていたのだ」³¹⁾。ゲットー創設当時から、ナチスはユダヤ教徒に対して日常的に暴力を奮っていたようである。ユダヤ教徒たちは伝統的な正装を固持することにより、ナチスに抵抗し、神への信仰心が揺るぎないことを宣言していたのである。

リングェルブルムの記録を読むと、ワルシャワ・ゲットーの状況がユダヤ人にとって一段と厳しさを増してからも、ユダヤ教徒がナチスの弾圧に抵抗していたことがうかがえる。1941年2月19日のオネグ・シャボスにはこう記されている。

ノヴォリピェ通りのブラクローウにある敬虔主義派の礼拝堂に「ユダヤ人たちよ、決して絶望するな！」と書かれた大きな看板が掲げられている。この礼拝堂で敬虔主義派の信者たちは、戦前と変わることなく、熱い信仰心をたぎらせて踊りを踊る。ある日礼拝を終えた後、この場所で前日に娘を亡くした1人のユダヤ人が踊っていた³²⁾。

その1カ月後には、ゲットーのプーリム祭³³⁾についての記述がある。1941年3月10

日の記録には次のように書かれている。

今年のプーリム祭を祝う集会が開かれた。人々は新たなプーリム祭を待望している。現代のハマーンことヒトラーの失脚を祝うために。新たなプーリム祭は、ユダヤ民族が存在する限り祝賀されるだろう。そしてユダヤ民族史上最も喜ばしいプーリム祭となるだろう³⁴⁾。

リングェルブルムは、1941年の過越しの祭の前には、「難民組織の事務所が恐ろしい状態になった」と記録している。祭日に食べるマツァー（種なしパン）と荷物を待つユダヤ人が事務所に殺到したのである³⁵⁾。ナチスの脅威に直面しながらも、ユダヤ人たちは過越しの祭に向けて準備を整え、酵母菌を入れない「悩みのパン」を食べ、より良い時期の到来と贖罪を願ったのである。しかしオネグ・シャボスの資料は、ナチスの暴力に一切抵抗しなかったとして、ゲットーのラビたちには厳しい言葉を浴びせかけている。リングェルブルムの記録によると、1人のユダヤ人の反抗的行動のためにナチスがユダヤ人を大量殺戮することを恐れるあまり、ラビたちは「殉教者精神の証を一片も見せることなく」、トーラーの巻物を足で踏み付けにしたという。ラビとすべてのユダヤ人に対するナチの脅しに屈して、この冒涇行為に及んだというのである³⁶⁾。リングェルブルムの非難が当時の状況を公正に検証した結果であるか否かは意見の分かれるところである。ゲットーには、ドイツ軍の横暴に対して武器を取って抵抗せよと呼びかけたラビも存在していたからである。しかし忘れてはならないのは、ユダヤ人にとっては、遠い昔から、無抵抗と話し合いこそが異教徒の権力者に対峙する唯一の手段だったということである。この戦略は2000年近くにわたり功を奏してきた。しかしユダヤ人のシヨアを企てたのはかつてない凶悪な敵であり、もはや従来の対応策は通用しなかった。ワルシャワ・ゲットーのユダヤ教徒は、ゲットーに暮らしていたすべてのユダヤ人がそうしたように、自分たちの知るただ1つの方法でナチスの暴虐に立ち向かっていたにすぎないのである。1942年の夏、ユダヤ人が死の収容所に大量移送される前にユダヤ教徒がナチスに対して武器を取らなかったからといって、65年後の世界に生きる我々が彼らを非難することができるだろうか。

リングェルブルムの記録の中から、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ教徒に関する記事をもう1つ紹介しておこう。これは1941年10月の記録である。

このローシュ・ハッシュャナー³⁷⁾の時期に、人々は強制労働に連行された。情報に通じたユダヤ人は礼拝が行われている間にドイツ兵を礼拝定足数に加え、礼拝室で賄賂を渡して強制労働を免れた³⁸⁾。

明らかにリングェルブルムは、新年祭の時期にドイツ兵をシナゴークに招き入れ、賄賂

エリ・イッサー・カヴォン：ワルシャワ・ゲットーにおける政治と宗教：労働シオニズムの物語を越えて

を渡して強制労働から免れていたユダヤ人たちを非難している。しかしこの記録がトレブリンカ収容所へのユダヤ人大量移送のわずか数カ月前のものであり、かつこの時すでに病気と飢えが蔓延するゲットー生活が1年に及んでいたことを考えると、ユダヤ教の新年祭にシナゴグに集って神に祈りを捧げていたユダヤ人が存在していたという事実には、筆者は感嘆を禁じ得ないのである。これは実に驚くべきことである。

最後に紹介するのは、この記録集に収められた資料の中でもとくに心を打つ逸話である。1942年5月の記録には、ユダヤ教の小祭り、ラグ・バオメル³⁹⁾を祝うワルシャワ・ゲットーの様子が次のように記されている。

子どもたちによる今年のラグ・バオメルの祝賀は非常に感動的であった。フェミナ劇場の大ホールでは、子どもたちによる出し物が大々的に催された。すべての学校の子どもたちが参加し、褒美に菓子が配られた。フェミナ劇場に向かう学童の行列が通りを埋め尽くしていた⁴⁰⁾。

ワルシャワの武装蜂起は、一民族の集合意識の中に絶えずとどめておくべき事件であるが、つらいゲットー生活を送りながらユダヤ教の祭日を祝った年若い学童たちの精神的な抵抗のことも決して忘れてはならない。このような感動的な精神的・文化的抵抗の記憶は、胸に深く刻んでおくべきである。このように、エマヌエル・リングェルブルムのオネグ・シャボス資料は、死と隣り合わせのワルシャワ・ゲットーでユダヤ人がどのようにしてユダヤ教を守り、ユダヤ教の行事を祝っていたかを垣間見せてくれるのである。

ワルシャワ・ゲットーにおけるユダヤ人の信仰生活を記録したもう1つの貴重な資料が、ヒレル・セイドマンが残した日記と回想録である⁴¹⁾。セイドマンは超正統派組織、アグダット・イスラエルに所属する正統派ユダヤ教徒であり、ワルシャワのユダヤ人共同体（ケヒッター）の文書保管責任者を務めていた。なおゲットー時代にはケヒッターはユダヤ人評議会の一部門となっている。セイドマンは戦前、戦中を通じて、ワルシャワのユダヤ人住民を束ねる大勢の指導者との間に交流を持っていた。本稿のテーマを考察する上でとくに注目すべきことは、この文書保管責任者が、ワルシャワの共同体を指揮していた多くのラビと親交を結んでいたという事実である。セイドマンはショアの後も生存していた。その日記と回想録は、ゲットーのユダヤ人の信仰生活について、リングェルブルムの記録よりもはるかに多くのことを伝えており、もっと深く研究されるべき資料である。

セイドマンの日記は、ユダヤ人のトレブリンカ収容所移送がピークを迎える1942年7月の記録から始まっている。そこには、ゲットーの若者たちがユダヤ教の聖典を学ぶ場

(イエシバー)を秘密裏に設けていたことが記載されている。これら学徒たちは空腹にあえいでおり、生き延びるために夜明けと共に外に出て食べ物をあさっていたという。セイドマンはイエシバーの学徒たちと出会い、ナチスの圧政に直面しながらも、彼らがトーラーを真摯に学んでいることに心を動かされたと記している⁴²⁾。

9月21日の日記には、労働を命じるナチスの目を盗んで、ユダヤ教徒がヨム・キプールの祭日を祝った様子が記されている。礼拝のために集まったユダヤ教徒で立錫の余地もない一室(作業場)で、著名なハッザーン⁴³⁾であるゲルシオン・シロタが祈りを先導した。有能ではあるが年老いたこのハッザーンが、過去のどの祈りよりも見事に朗詠を披露したことに、信徒たちは驚きと感動を覚え、多くの者が目に涙を浮かべていたという⁴⁴⁾。

セイドマンはさらにこの日の日記に、ユダヤ教徒たちがアヴィヌ・マルケイヌ⁴⁵⁾の厳かな祈りの言葉を主唱者と共に唱えた感動的な光景を綴っている。収容所への大量移送が断行されてからわずか数週間しか経っていないにもかかわらず、ユダヤ教徒たちは神に祈りを捧げる強さを持っていた。これは驚くべき事実であり、ワルシャワ・ゲットーに暮らすユダヤ人たちの豊かな精神・信仰生活と強い反骨心を物語っている。

スコット祭⁴⁶⁾の日の日記には、ラビ・アブラハム・ヘンデルが、ラビとイエシバーの学徒に紛れ込んでゲットー内の作業場に忍び込んだことが書かれている。彼らは作業を進める傍らで祭日の祈りを唱え、その後記憶の中からタルムードの文言を引き出して、その教えを確かめ合ったという。作業監視役のドイツ兵に見つかる危険をおかしての行動であった。セイドマンは彼らの信仰の深さと大胆な行動力に称賛の言葉を贈っている。

セイドマンが記す反骨心を体現したのが、ワルシャワの偉大なラビ、メナヘム・ジエンバの生き方と死に様である。1942年のスコット祭の日、ラビ・ジエンバは危険を顧みず、アパートの自室の屋根を突き破って素朴な仮庵(スカー)を作るという大胆な行動に出た。急ごしらえの庵に集うという戒律(ミツバー)を守るために、何百人ものハシディズム派ユダヤ教徒とイエシバーの学徒がジエンバのアパートに押し寄せた。一方このラビの住む建物には、大勢のユダヤ人警察が暮らしていた。彼らがジエンバを裏切り、ユダヤ人評議会の上層部にこの集会のことを通報したために、ジエンバは罰を受けることは免れたものの、新たな居住区への移動を強いられることになった⁴⁷⁾。

メナヘム・ジエンバは、1943年4月の武力蜂起まで、ワルシャワ・ゲットーに生存した最後のラビの1人である。ナチスを前にして彼が発揮した気高い英雄的行為は敬意に値するものであるが、これまでその行為が正当に評価されたことはなかった。ジエンバは、1883年に貧しいハシディズム派ユダヤ教徒の一家に生まれた。人生のほとんどを生

エリ・イッサー・カヴォン：ワルシャワ・ゲットーにおける政治と宗教：労働シオニズムの物語を越えて

活苦との闘いに費やしたが、1935年にポーランドのアグダット・イスラエルの重鎮となってからはワルシャワのラビ評議会の中で頭角を現し、ゲットー内で格上のラビがナチスに殺害されるにつれ、その地位を上げていった。ジエンバはゲットーにおける良心の声であった。自らは1度もライフルや手榴弾を手にする事なく、その人間性の力でゲットーのユダヤ人に対してナチスの弾圧に抵抗するよう呼びかけた⁴⁸⁾。

ユダヤ教では、敵との闘いにおいて殉教の道を選ぶことが伝統的に信仰の証とされていた。しかしジエンバは、この手段はもはや通用しないと考えた。ナチスの大量殺戮に対しては、別の対応、すなわち武装抵抗が必要だと判断したのである。ジエンバはその転換の根拠をハラハー（ユダヤ法）に求めた⁴⁹⁾。1943年1月14日（蜂起のわずか数カ月前）、ワルシャワのユダヤ人指導者の生き残りを集めた会議の場で、ジエンバは断固として武装抵抗を主張した。その言葉はワルシャワのユダヤ人指導者たちの心に突き刺さった。

ただ今より我々は、ウムシュラークプラッツ⁵⁰⁾への途につくことを断固拒否しなければならない。これが目くらましであり、罠であることは明らかだ—その道行の先に待つのは大量殺戮である。(略)我々が本当に「英知と理解力を備えた民族」の名にふさわしい存在であったなら、ユダヤ人を根絶やしにしようとする敵の策略を当初から見抜き、あらゆる情報媒体を駆使して世界中の良心に訴えていただろう。今や我々に残された道は抗戦あるのみ。ユダヤ法は他者を裏切ることを禁じている。またこのまま易々と宿敵の手に落ちることも許されない。(略)⁵¹⁾

ジエンバの発言後も議論は続いた。ユダヤ人指導者たちが抵抗に反対することを危惧したジエンバは、先の発言よりも一段と熱を込めてこう訴えた。ユダヤ人が今直面しているのは、その長い歴史にも例を見ない非道な弾圧と殺戮の危機であり、これまでのように信仰に殉ずるのではなく、別の手段で事態に対応しなければならない。

神の御名の聖なることは様々な形で示される。(略)過去の宗教弾圧の時代には、法の下で、「たとえ最も些細な営みのためであっても、己の命を投げ出すこと」がユダヤ教徒に求められた。しかし今、我々の前に立ちはだかるのは、何が何でもユダヤ人を絶滅させようとする残虐極まりない邪悪な敵である。ハラハーは、神の御名を聖なるものとするために、無比の決意と勇気を持って、最後の最後まで闘い、抵抗することを求めている⁵²⁾。

このときの会議は、「プラガのガオン」ことラビ・ジエンバの上記の言葉で締めくくられた。筆者が1943年1月のジエンバの宣言に心を惹かれるのには2つの理由がある。1つは、ジエンバが、命の危険を顧みず、仮庵を作るなどして、ゲットーで戒律を実行したことである。それだけではなく彼は、ショアというおぞましい現実を前に、ユダヤ

法の輪郭を書き換えるというさらに大胆な行動に出た。ハラハーを引き合いに出して、ユダヤ民族史上例を見ない最悪の事態に対処しようとしたのである。殉教については、ジエンバは自身を取り巻く恐ろしい世界や凄惨な経験の枠内でユダヤ法を解釈した。ナチスによる大量殺戮の危機に瀕した今、殉教や神の名を聖なるものにするという伝統的な考え方は通用しない。神とユダヤ法は別の行動を求めている。こう主張することでジエンバは、ハラハーを引き合いに出しながらも、災厄に対するユダヤ人の歴史的な対応のあり方を一変するという思い切った行動を取ったのである。これは崇高な英雄的行為であったと筆者は考える。

2点目は、1943年1月の発言の中でジエンバがナチスへの抵抗の根拠をハラハーに求めていることである。なぜそうしなければならなかったのか。トレブリンカ収容所でユダヤ人が大量に殺戮されているという事実だけでも、武装蜂起を正当化することができたのではないか。確かにその通りである。しかしジエンバはあくまでもユダヤ教徒であり、非道な弾圧や残虐行為を目の当たりにしてさえ、ユダヤ法を逸脱する行動を取ることとはできなかったのである。数年に及ぶゲットー生活で飢えと病に苛まれながらも、トーラーとユダヤ教に対するメナハム・ジエンバの忠誠心が揺らぐことはなかった。彼の気高い生き方は決して忘れ去るべきではない。

ゲットー蜂起直前の1943年4月、ワルシャワに残された最後のラビ、メナヘム・ジエンバ、ダヴィド・シャピロ、サムソン・ストックハマーの3名は、ワルシャワ市内の安全な「アーリア人」地区に避難するよう勧められたが、彼らはその申し出を断った。ゲットーのユダヤ人を見捨てるわけにはいかなかったのだ。その数日後、ジエンバはゲットーの路上でドイツ兵に撃たれて命を落とす。3人のラビの内、生き残ったのは唯一シャピロだけであった。ワルシャワ・ゲットーを離れることを拒んだ彼らこそ、最も崇高な精神的抵抗の体現者であった。我々はZOBやZZWなど、武器を手に立ち上がったゲットーのユダヤ人のことを誇りに思い、常に記憶に留めておくべきである。だがそれと同時に、メナヘム・ジエンバとその仲間のラビたちの英雄的行為についても、深く心に刻まねばならない。

ポスト・シオニズム—声なき声は再発見されたのか

以上、修正シオニストとユダヤ教徒がワルシャワ・ゲットーで果たした役割を振り返ってきたが、もちろんこれは単なる机上の議論ではない。イスラエルでは建国後30年にわたり、労働シオニズムが国内の政界と思想界を牛耳っていた。ダヴィド・ベン＝グ

リオンとマパイ党が分かりやすいメッセージを発信して人々を鼓舞し、国家の結束を促して、国民を囲い込んだ。建国当初のイスラエルが何百万人もの移民を受け入れることができたのは、労働シオニズムのイデオロギーに基づき、出身を問わずすべてのユダヤ人に一致団結が呼び掛けられたためである。社会主義と世俗化したユダヤ教、ヘブライ暦の伝統が一体となって強力な基盤を構築し、1948年の建国前夜から建国後の長年にわたり、このユダヤ人国家を偉大な成果へと導いていった。当時この国を突き動かしていたのは、労働党のイデオロギーであった。そしてイスラエルは、国家の結束を固めるためにただ1つの物語を必要としていた。他の物語がほとんど日の目を見なかったのはそのためである。修正主義派からは異議を唱える声が上がったが、イスラエルの国会ではそうした声は少数派でしかなかった。宗教政党や、アラブおよびイスラーム圏出身のユダヤ人、アラブ系イスラエル人も押しなべて沈黙を守り、労働シオニズム政権下のイスラエルにひっそりと暮らしていた。こうして、一世代の長きにわたり、ただ1つの物語だけがイスラエル国家に君臨していた。ベン＝グリオンと労働シオニズムの物語だけが。

ところが30年前に事態は急展開を迎える。国内の宗教政党とアラブおよびイスラーム圏出身のユダヤ人コミュニティーの支持を受けてリクード政権が発足し、労働シオニズムの支配は劇的な最期を遂げたのである。同時に、それまで黙殺されてきた国内の集団が、イスラエルの政界や社会で頭角を現すようになった。労働シオニズムのイデオロギーはもはや過去の遺物であり、国民の期待に応える力を持たないことにイスラエル国民が気づいたのである。今このユダヤ人国家では、ゆっくりと、しかし確実に、新たな物語が姿を現そうとしている。だからと言って、イスラエル国家を建設し発展させてきた労働シオニズムの功績が否定されるわけではない。ただ、これまで社会の片隅に埋もれていた集団に、日の当たる場所で声を上げる機会が与えられたのである。労働シオニズムの衰退は、イスラエルのユダヤ人とアラブ人を解放する力となった。労働シオニズム支配の終焉に伴い、イスラエルには埋めなくてはならないイデオロギーの空白が生じた。その空白は、今現れつつある新たな物語により埋められるだろう。ただしそのためには時間が必要である。

新たな物語の台頭が良いこと尽くめだと言うつもりはない。労働シオニズムの衰退には負の側面もあるからだ。実際に新たな物語の中には、単にシオニズムを批判しているだけのものも存在する。シオニズムの活動の正当性を絶えず否定してきた集団と言えば、真っ先に超正統派ユダヤ教に属する様々なハシディズム派セクトの名が挙がる。今日イスラエルでは、超正統派人口が急増しており、わずか65年前に絶滅の危機に瀕していたハシディズム派のコミュニティーが復活を遂げている。こうした復活や復興自体は

結構なことであるが、一方この一世代の間にネトゥレイ・カルタのような過激な集団が発言力を増していることも事実である。また労働シオニスト政権下では気弱な追随者でしかなかった非シオニズム派の宗教政党が、今では混迷するイスラエルの政局で連立政権発足のカギを握る存在にまでなっている。リトアニア派の超正統派ユダヤ教徒とセファルディー系の反体制抵抗運動という意外な組み合わせから誕生したシャス党の躍進は、国民をまとめていた支配的な物語が崩壊した後に国がたどる運命を示唆している。アラブおよびイスラーム圏出身のユダヤ人の物語をイスラエル社会の基礎に組み込むことは確かに必要であるが、その一方で反シオニズムや非シオニズム系の宗教コミュニティが勢力を拡大していることは、大きな懸念につながっている。労働シオニズムが後に残した空白は是非とも埋めなければならない。しかしその空白を埋めるのは、己に利する場合を除いてシオニズムの活動に全く関心を持たない集団の役割ではない。

イスラエルで、イデオロギー的に超正統派の対極に位置するのが、「ポスト・シオニスト」である。シオニズムを専門とするイスラエルの歴史家、エフード・ルツは、イスラエルとユダヤ史における権力とユダヤ人アイデンティティーに関する2003年の研究の中で、「ポスト・シオニスト」の役割を次のように説明している。

近年、「ポスト・シオニスト」と呼ばれるイスラエルの歴史家と社会学者の間で、イスラエルにまつわる虚構を歴史的、倫理的に批判しようとする動きが現れている。この一団は政治的左派と同一視され、シオニストの過去に対する従来の理解を正し、ひいてはシオニストのアイデンティティーを見直そうと呼び掛けている。これらの研究者がとくに重点的に取り組んでいるのが、現在のイスラエルとアラブ系パレスチナ人の対立におけるシオニストの罪状を問い直すことである。シオニスト側の物語は事実を歪曲していると彼らは主張する。シオニストが描くイスラエル国民像は、再三にわたる軍事攻撃の犠牲になってきた正義と平和を愛する民族というものであるが、実際にはイスラエル側からも意図的に攻撃を仕掛けており、こうした行動と国民像との間には大きな落差がある。ポスト・シオニズムを標榜する批判者たちは、この国民像の背景にある虚構を打ち崩し、シオニズムが当初からこの地域を占領し、アラブ人住民を段階的に追い出す意図を持っていたことを証明しようとしている。さらに、イスラエルは領土的野心を優先するあまり和平を実現するチャンスを失し、人道的かつリベラルな価値観とは無縁の民族主義的、軍国主義的社会の台頭を招いたと非難している⁵³⁾。

ルツ自身は、こうした自己破壊的な「ポスト・シオニスト」の議論からシオニズムを擁護する立場を取っている。当然のことであるが、労働シオニズムのイデオロギーの衰退に伴って生じた空白部では、イスラエル国民自身から、労働シオニズム側の物語を疑問視する声上がるべきであった。国家建設の父を絶対視する風潮に国民が疑問を呈し始めたとき、我々はそこに社会の成熟の兆しを見ることができる。しかし「ポスト・シオニスト」たちのように、シオニストの残した功績まで否定する必要があるだろうか。

エリ・イッサー・カヴォン：ワルシャワ・ゲットーにおける政治と宗教：労働シオニズムの物語を越えて

イスラエル建国から一世代にわたって続いた労働シオニズムのイデオロギー的支配だけを批判して、労働シオニズムが果たしてきた数々の偉業や成果は今まで通り評価すべきではないだろうか。闇雲に前権力者を否定することは、真の成熟の兆しとは呼べない。むしろ我々がなすべきことは、新たな物語をイスラエルの社会とイデオロギーの生地に織り込み、我々の耳にすでに届いているものも、未だ届かないものも含め、多様な声が織りなすモザイク画を描くことではないだろうか。

結び 「ポスト労働シオニズム」—新たな物語の誕生

ワルシャワ・ゲットーの歴史と1943年4月の武装蜂起の経緯を振り返る過程は、様々なユダヤ人コミュニティーや政治団体が挙げる数多くの声に耳を傾け、そこから1つの物語を紡ぎ出す絶好の機会でもある。確かに、労働シオニストがゲットーの生活で果たした役割は、ユダヤ人の歴史とシヨアを理解する上で欠かせないものである。しかしポーランド各地のゲットーの住民がどのように生き、どのように死んでいったのか、その全容を把握するには、労働シオニスト側の物語だけでは不十分である。筆者が本日ここに求めるのは、多様な物語を1つにまとめ上げ、すべてのユダヤ人の声を網羅した「新シオニズム」である。このシオニズムは、修正シオニストの掲げる展望も、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ教徒が示した不屈の精神や英雄的行為も決して貶めるものではない。現代の時代を「ポスト・シオニズム」時代と呼ぶことができないとしても、そしてシオニズムが今も正当で効果的な路線なのだとしても、筆者が自信を持って言えるのは、我々は今確かに「ポスト労働シオニズム」の時代に生きているということである。これが意味するのは、ダヴィド・ベン＝グリオン、ベルル・カッツネルソン、ゴルダ・メイアらの遺した遺産を否定するということではない。イスラエルがユダヤ人国家として、そして民主主義国家として今後も永らえてゆくためには、すべての国民の声を結集して、魅力的で深遠なユダヤ民族史の物語を語り継いでゆかなければならないということなのである。

注

- 1) Anna Porter, *Kasztner's Train* (New York: Walker & Company, 2007), pp. 354-355.
- 2) 第二次世界大戦中のナチスによるユダヤ人大量虐殺は一般的に「ホロコースト」と呼ばれているが、筆者はヘブライ語の「シヨア」という言葉を使いたい。「ホロコースト」が元来「丸焼きにして祭壇に供えるいけにえ」を意味する宗教用語であるのに対

し、ヘブライ語の「シヨア」は「悲劇」を意味する一般用語であり、神学的なニュアンスを含まない。そのため、神学的議論とは別にナチスとその協力者によるユダヤ人殺戮を論じる場合はこの言葉の使用が望ましい。

- 3) Porter, *op. cit.*, p. 1.
- 4) ダヴィド・ベン=グリオンのマパイ党に代表される労働シオニズムは、社会主義とシオニズムを一体化した思想である。労働シオニストは、パレスチナの英国委任統治時代から、将来のユダヤ人国家建設を視野に、着々と経済的・政治的基盤の整備を進めていた。ベン=グリオンとマパイ党は、イスラエル国家設立直後から30年間にわたり権力の座にあった。そしてこの間、戦争を行い、国内経済を発展させ、ヨーロッパはもとより、アラブ圏やイスラーム圏からも大勢のユダヤ人移民を受け入れた。
- 5) Porter, *op. cit.*, pp. 324-326.
- 6) 修正シオニズムを創設したウラディーミル・ジャボティンスキー（1880～1940年）は、能弁家、ジャーナリスト、翻訳家、シオニズム推進者として活躍したロシア系ユダヤ人。修正シオニズムは、ベン=グリオンによる社会主義とシオニズムの統合を否定していた。ジャボティンスキーが提唱したのは、ヨルダン川兩岸をユダヤ人国家とすることで、シオニストの活動に階級闘争を持ちこもうとする動きには断固反対の姿勢を貫いた。また労働シオニストがイスラエルに徐々に入植地を建設しようとしていたのに対し、ジャボティンスキーは迫害された何百万ものヨーロッパのユダヤ人をパレスチナに移住させることを企図した。
- 7) Porter, *op. cit.*, p. 328.
- 8) Eran Kaplan, *The Jewish Radical Right* (Wisconsin: University of Wisconsin Press, 2005), p. 167.
- 9) *Ibid.*, p. viii.
- 10) Tom Segev, *Elvis in Jerusalem* (New York: Metropolitan Books, 2002), p. 89.
- 11) *Ibid.*
- 12) Israel Gutman, *Resistance: The Warsaw Ghetto Uprising* (Boston: Houghton Mifflin, 1994), p.152.
- 13) Gilbert, *op. cit.*, p.71.
- 14) Walter Laqueur, *A History of Zionism* (New York: Holt, Rinehart, and Winston, 1972), p. 368.
- 15) Yisrael Gutman, *The Jews of Warsaw: 1939-1943* (Bloomington: Indiana University Press, 1982), pp. 294-295.
- 16) Gilbert, p. 250.
- 17) ZZW 指揮官の最期の様子は以下の著作に記載されている。Reuben Ainsztein, *The Warsaw Ghetto Revolt* (New York: Holocaust Library, 1979).
- 18) Yisrael Gutman, *The Jews of Warsaw*, p. 293.
- 19) Israel Gutman, *Resistance: The Warsaw Ghetto Uprising*, pp. 168-9. ウドウインスキの回想録は1963年に『*And We Are Not Saved*』というタイトルで英語で出版された。
- 20) Reuben Ainsztein, *The Warsaw Ghetto Revolt* (New York: Holocaust Library, 1979), p. 19.
- 21) *Ibid.*, pp. 157-8.
- 22) モーシェ・アレンスの経歴はインターネットの Answers.com のサイト (Biography: Moshe Arens) で見ることができる。

- 23) Moshe Arens, "The Warsaw Ghetto Uprising: A Reappraisal," in *Yad Vashem Studies XXXIII* (2005), p. 101.
- 24) *Ibid.*, pp. 107-108.
- 25) *Ibid.*, p. 142.
- 26) 「レベ」はハシディズムの世界のラビを指す。ハシディズム運動は18世紀初頭にバアル・シエム・トーヴにより開始された東欧の大衆運動で、当時共同体の指導者であった特権的な学者を批判していた。
- 27) 「オネグ・シャボス」とはイディッシュ語で「安息日の喜び」の意味。
- 28) Walter Laqueur (ed.), *The Holocaust Encyclopedia* (New Haven: Yale University Press, 2001), p. 457.
- 29) Emmanuel Ringelblum, *Notes from the Warsaw Ghetto* (New York: McGraw Hill, 1958), p. 80.
- 30) *Ibid.*, p. 83.
- 31) *Ibid.*, p. 111.
- 32) *Ibid.*, p. 125.
- 33) プーリム祭とは、ユダヤ人虐殺を目論むハマンの企てをユダヤ人が阻止した故事にちなむ春の祭。
- 34) Ringelblum, *op. cit.*, p. 139.
- 35) *Ibid.*, p. 154.
- 36) *Ibid.*, p. 174.
- 37) ユダヤ教の新年。
- 38) Ringelblum, *op. cit.*, p. 224.
- 39) 過越しの祭とシャブオット（七週の祭）には含まれたユダヤ教の小祭日。
- 40) Ringelblum, *op. cit.*, p. 287.
- 41) Hillel Seidman, *The Warsaw Ghetto Diaries*, trans. Yosef Israel (Southfield, Michigan: Targum Press, 1997).
- 42) *Ibid.*, pp. 97-100.
- 43) 「ハツザーン」とは主唱者を意味するヘブライ語。
- 44) Seidman, *op. cit.*, p. 128.
- 45) ヨム・キプールの祭日に唱えられる伝統的な祈り。
- 46) スコット祭とは秋の巡礼祭のこと。この期間はスカー（仮庵）の中に座って、荒野を旅した古代のユダヤの民を偲ぶ。
- 47) Seidman, *op. cit.*, pp. 347-8.
- 48) "Menahem Zamba" in *The Encyclopaedia Judaica*, First Ed. (Jerusalem: Keter, 1972), Vol. 16, p. 986.
- 49) Ehud Luz, *Wrestling with an Angel: Power, Morality, and Jewish Identity*, translated by Michael Swirsky (New Haven: Yale University Press, 1998), p. 59.
- 50) 鉄道の引き込み線があった収容地。ワルシャワのユダヤ人はここからトレブリンカ絶滅収容所に移送された。

- 51) “Menahem Ziemba of Praga” by Rabbi Israel Elfenbein in *Guardians of Our Heritage (1724-1953)*, edited by Leo Jung (New York: Bloch Publishing, 1958), p. 611.
- 52) *Ibid.*, pp. 611-12.
- 53) Ehud Luz, *op. cit.*, p. 264.